

副詞「どうせ」の意味と機能

杉本和之

(日本語日本事情研究室)

1. はじめに

「どうせ」は日本人の日常会話で非常に多く用いられる副詞である。よく知られているように、歌謡曲においても独特の情緒を伴って数多く用いられている。このことから、一般的には、ともすれば「どうせ」は悲観、無気力、諦めといった暗いイメージの語だと考えられやすい。しかし実際に多くの用例を調べてみると、それほど単純な語ではないことが分かる。「どうせ」の用法はそれと呼応する述部との関係に応じて複雑な意味構造を形成している。同種の、推論結果を誘導する副詞「多分」「きっと」「当然」などと比較しても、その機能は、直接的な誘導ではなく微妙な裏のニュアンスを含意した独特の誘導機能を持っており、注目に値する。

以下、この小論では副詞「どうせ」の文中における意味と機能の概要を、実用例を多く用いて、そのムードを中心に素描してみることにする。

なお副詞「どうせ」の学術的な先行研究は非常に少なく、管見するところわずかに森田良行『基礎日本語1』(1977)と森本順子『話し手の主観を表す副詞について』(1994)のみである。共に紙数の関係から多くの用例は紹介されていないが、前者は「どうせ」を「細かな問題をあれかこれかと詮議している場合、そのような問題設定以前に、すでにより基本的な大前提が定められていて、いずれにせよ結局はその前提通りに事が落ち着くのだという発想」に基づく語だとしている。後者は「どうせ」を「その文で述べる出来事が不可避免的に起こるという観点をつけ加える」働きをもつと見なし、「文の機能という点からみると、文脈中で、理由・原因、または根拠として働く文の中に現れる傾向が非常に強い。」という興味深い指摘を行っている。

なお、例文の出典は次の通りである。いずれも『NEC CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(新潮社版)による。

- | | |
|--------------------|-----------------|
| (山本) 阿川弘之『山本五十六』 | (砂) 安部公房『砂の女』 |
| (女) 赤川次郎『女社長に乾杯!』 | (黒) 井伏鱒二『黒い雨』 |
| (あす) 井上靖『あすなる物語』 | (沈黙) 遠藤周作『沈黙』 |
| (金) 三島由記夫『金閣寺』 | (楡) 北杜夫『楡家の人々』 |
| (人間) 太宰治『人間失格』 | (こ) 夏目漱石『こころ』 |
| (路傍) 山本有三『路傍の石』 | (点) 松本清張『点と線』 |
| (ビル) 竹山道雄『ビルマの豎琴』 | (野火) 大岡昇平『野火』 |
| (新橋) 椎名誠『新橋烏森口青春篇』 | (孤高) 新田次郎『孤高の人』 |

- (パ) 開高健「パニック」『パニック・裸の王様』
(放浪) 林美美子『放浪記』
(ハム) シェイクスピア 福田恆存訳『ハムレット』
(月) サマセット・モーム 中野好夫訳『月と六ペンス』
(トム) マーク・トウェイン 大久保康雄訳『トム・ソーヤの冒険』
(罪) ドストエフスキー 工藤精一郎訳『罪と罰』

2. 「どうせ」の基本的性格

副詞「どうせ」が文中で使用される場合、それがどのような述部を導き、結局全体としてどのような意味を示すかということを考察すると、その基本的性格として、次の3つが抽出できる。

1) 既定性

ある事態の先行きを考える場合、主体の努力・期待・予測の如何に拘らずその結果が予め決定されていること。或いは、ある事態の現状を考える場合、主体の努力・期待・思案の如何に拘らずその本質が予め決定されていること。この性格は次のような例文によって確認できる。

- (1) 「いやァ、俺なんか、どうせギロチンか、セント・ヘレナ送りだよ」(山本)
- (2) どうせ桑田伸子の社長など長くは続かない。(女)
- (3) 「駄目だ、駄目だ、もうすぐ自分は駄目になる。どうせそうなるのだ。内地にいたらあと数年は生きられただろう。だがもうお終いなのだ」(楡)
- (4) どうせ故郷もない私、だが一人の母のことを考えると切なくなって来る。(放浪)
- (5) どうせ原爆病は不治の病だという見方がこの曲解を招き易くする。(黒)

上の(1)～(3)が事態の先行きに関する使用例で、(4)(5)が事態の現状に関する使用例である。いずれも既定の運命の前では人間の努力や思案は無用だという内容をもっている。このような暗い結末を表示しない以下のような例文でもやはり、結果・本質の既定性という点では共通している。

- (6) 「知らないわ。マスターなら知ってっかもね。どうせ、家にゃいないわよ」(女)
- (7) 「見たところちっともどっこも悪そうでないがな。どうせじきに退院なのだろ？」(楡)

2) 短絡性

推論過程、或いは判断の過程における短絡化傾向をいう。1)の既定性と表裏一体をなしているが、一つ一つ段階を追った後の結論・結末でなく一足跳びの結論・結末を提示する。結論・結末が予め決定されているのであるから、当然短絡的性質を帯びることになる。上記(1)～(7)の例文でもその性格は確認できるが、さらに2つ例文を付け加える。

- (8) 「どうせ何もかも飯事(ママゴト=筆者)だ。だからこそ、却って熱意を籠めなくちゃいかんのだ。……」(黒)
- (9) どうせ死ぬのなら一刻も早くこの苦しみから逃れたいと思ったのでしょうか。(沈黙)

この短絡性は副詞「どうせ」に特有の性格ではない。他の副詞「とにかく」にも同様の性格が見受けられる。「とにかく早くしろ」「とにかくアフリカへ行きたい」「外はとにかく暑い」。しかし「とにかく」が主に話し手の意志を表す文に用いられ、話し手の主張、言いたいことを短絡的

に表現しようとするのに対して、「どうせ」は話し手の意志を表す文に用いられことがほとんどなく、話し手が短絡的に推論・判断を下す際に使用されるという相違点がある。

3) 見くびりのムード

見くびりの対象は主として話し手自身であるが、他に聞き手、他人、他物、一般的状況の場合もある。対象は変わっても、見くびりの主体自体は常に話し手である。このムードも結局は上記1) 2) に起因するものであり、主体の努力・期待・思案の如何に拘らず短絡的に既定の結論に結び付くという規制から必然的にもたらされるものであろう。但し、述部が否定形でもなく、マイナス・イメージの語句でもない場合、「見くびりのムード」はほとんど消滅することがある。例文(15)(16)がその例である。なお、この「見くびりのムード」の詳細については後に紹介することにする。

- (10) 「どうせ私は失格なのよ」と、すっかり落ち込んでいる。(女)
- (11) ……でも、ヨシちゃんは、許してやれ。お前だって、どうせろくな奴じゃないんだから。(人間)
- (12) あんな婆あんなか問題じゃない！ 老婆はどうせ病気だったんだ……(罪)
- (13) ……それから、万国旗、万国旗だ。なに、こんなものはどうせ安いものだろう」(楡)
- (14) どうせ世の中は欲と金、ばあつとやっちゃおうよ、ばあつとさ、……(路傍)
- (15) 「結構ですね。ついでにパチンコ・ワナやネコイラズの業者にも当たっておきます。これはどうせいる(要る=筆者)ものですからね」(パ)
- (16) 「それなら歩きながら聞こうか、どうせきみも、これから会社へ行くんだろう」(孤高)

以上見てきたように、副詞「どうせ」はほとんどが会話かさもなくば独白の文で用いられている。要するに主観性の強い文体の中で使用されている。客観性の強い新聞報道や学術的な文章の地の文で用いられることはありえない。それは、上に挙げた3つの基本的な性格から必然的にもたらされるものである。同様に、会話においても、上位者の行為・状態に対する直接的なコメントの場合、話し手と上位者である聞き手の間に親密な関係がない限り、礼を失する文となって使用できない>(*印は文法上、或いは語用論上不的確な文であることを示す。)

- (17) *三角形の内角の和はどうせ180°だ。
- (18) *社長は明日はどうせお休みなんでしょう。
- (19) 君は明日はどうせ休みなんでしょう。
- (20) *社長のスピーチはどうせ最後ですよ。
- (21) 僕のスピーチはどうせ最後ですよ。

3. 「どうせ」の形態上の類型

よく知られているように、副詞「どうせ」が文中で用いられる場合、形態上、次の2つに大別される。即ち、「どうせ+述語」の場合と「どうせ～なら」の場合である。次の例文に見るように、「どうせ+述語」の場合は述部に話し手の意志を表す表現(意志動詞、命令形、意向形、希望の「～たい」等)が来ないのに対して、「どうせ～なら」の場合は意志動詞が入り得るという

差がある。「どうせ」の意味自体もかなり異なる。

- (1) 「いやア、俺なんか、どうせギロチンか、セント・ヘレナ送りだよ」(山本)
- (4) どうせ故郷もない私、だが一人の母のことを考えると切なくなって来る。(放浪)
- (11) ……でも、ヨシちゃんは、許してやれ。お前だって、どうせろくな奴じゃないんだから。(人間)
- (9) どうせ死ぬのなら一刻も早くこの苦しみから逃れたいと思ったのでしょう。(沈黙)
- (22) 私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。(こ)
- (23) どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。(こ)

「どうせ～なら」が「どうせ+述語」と最も大きく異なるのはムードの面である。既定性、短絡性においては両者とも共通しているが、「どうせ～なら」の場合は開き直りのムードが現れやすい。既定性を先取りして、その対抗策として積極的な開き直りのムードが現れるのである。

ところで(22)の「買う」、(23)の「書く」は共に意志動詞ではあるが厳密には話し手の自由意志を表しているとは言いがたい。「買う」「書く」は共に既定性の範囲内での意志であり、即ち将来「買うことになる」「書くことになる」という規制下にある。話し手の直接的な意志を表す命令・意向の表現は「どうせ～なら」には入らない。この点で、先に挙げた「とにかく」と比べて「どうせ」は根本的に異なる。

なお、「どうせ～なら」の形式のグループとして、次のような「どうせなら」「どうせのことなら」「どうせ～としたら」の形も入り得る。

- (24) 「そうかね、どうせなら賑やかな方が正月らしくていいじゃないか」(孤高)
- (25) 僕は、どうせのことなら、もう一つ訊いてやれと思った。(月)
- (26) どうせこの盃を飲みほさねばならんとしたら、そんなことどうでもいいじゃないか？
(罪)

「どうせなら」「どうせのことなら」は述部の省略、「どうせ～としたら」は仮定条件の「なら」の代わりに同じ仮定条件を表す「としたら」が入ったものである。

4. 述部の類型と「どうせ」の機能

4-1. 未来予測と現状認識

「どうせ」と呼応する述部が時間的に未来の予測を示すものか、あくまで現状の認識を示すものかによって、「どうせ」の意味・機能も大きく異なる。それは通常考えられる、述部が動作・作用を表す動詞を中心とした動的述語か、それとも「名詞+だ」、形容詞、状態動詞の静的述語かといった分類ではなく、むしろテンス上の未来時か、現在時かといった分類に関わるものである。もちろん現在時を表せる述語は静的述語しかありえないが。

- (1) 「いやア、俺なんか、どうせギロチンか、セント・ヘレナ送りだよ」(山本)
- (27) 「まあ……。会社を再建するかどうかによるな。お前みたいな下っぱはまず人員整理でどうせクビだ」(女)
- (2) どうせ桑田伸子の社長など長くは続かない。(女)
- (28) 「あの人たち、どうせ帰って来はしないと思うの。朝鮮かどこかへ渡ってしまったと

いう噂よ」(あす)

以上の例は述部が未来時を表しており、主体の未来の姿について予測する際、既定の結末を招来することを述べている。例文としてはこのケースが圧倒的に多い。

(29) 「ええ、ばかですよ。どうせわたしは、ばかなんだから……」(放浪)

(30) 「(お前の教わった先生は=筆者) えらいことなんかあるものか。どうせ、三もん文士さ。」(路傍)

(31) この広間の辺をぶらぶらしながら、お待ちするとしよう。王のお望みとあるからにはな。どうせ運動の時間だ。(ハム)

この3つの例は述部のテンスが現在時を表すもので、未来予測ではない。これらの場合は、述部が表す現在の性質・状態をどう把握・認識するかが問題で、「どうせ」を用いることによって、それが既定・不動の本質であることを示している。

なおこれ以外に、数は非常に少ないが、「どうせ」が述語の過去形と呼応する場合がある。この場合、現在から時間を溯行した過去の事態の推測か、過去の事態に規定された現状の本質かのいずれかを示すことになる。両者とも上述した「未来予測」「現状の本質規定」の亜種だと考えられる。

(32) どうせトランクは持っていたらうから、それを捜す必要もある。(点)

(33) 「でも、あんなことしてりゃ、どうせその内、ああいう目にあったわ。同じことよ」(女)

(34) 「私はどうせどぶのなかから誕生したのです。哀れまれる事はないのよ」(放浪)

(35) 「俺たちはどうせ中隊からおっぼり出されたんだから、無理に戦争することあねえわけだ」(野火)

(32) (33)は前者の用例であり、(34)(35)は後者の例である。

4-2. 述部のイメージ

「どうせ」が基本的に見くびりのムードをもつということから、「どうせ」と呼応する述部自体にもマイナス・イメージの語句が用いられやすいことが想定できる。またマイナス・イメージと繋がりやすい否定形の多用も想定しうる。事実筆者が『新調文庫の100冊』から抽出した「どうせ」の引用例を検討した結果も、156例中55例が否定形、74例がマイナス・イメージの語であった(他に中立イメージ23、述語なし6)。マイナス・イメージの語としては、既に挙げた35例の例文中にもギロチンか、セント・ヘレナ送り、駄目だ、不治の病、飯事(ママゴト)、死ぬ、失格、病気、クビ、ばか、三もん文士、ああいう目にあった、どぶのなかから誕生した、おっぼり出された、と多く見られる。否定形としては、長くは続かない、故郷もない、家にゃいない、ろくな奴じゃない、帰って来はしない、とやはり多用されている。これ以外にももちろん、やや数は少ないが、中立イメージの語として、退院、要る、会社へ行く、運動の時間だ、も使用されている。なお、中立イメージの語が使用される場合は、「どうせ」の意味、或いはムードがどうなるのか、次節以降で検討してみることにする。

5. 「どうせ」のムード

「どうせ」は基本的に見くびりのムードを表す(ほとんどムードをもたない場合もあるが)。

そして先述したように、「見くぶり」の対象は話し手自身、聞き手、他人、他物、一般的状況に分かれる。以下それぞれのケースを考察する。

1) 話し手自身

文中で話し手自身が主題ないしは主格として扱われ、話し手自身が見くぶりの対象となる場合で、数量的には最も多い。これを更に、自嘲、開き直りの2つに分けて分析する。原則として述部は全て否定形ないしはマイナス・イメージの語である。

自嘲は自分自身を攻撃対象にする情緒性の高い表現である。もちろん悲観的な結論・結末を導くもので、文が暗い色調に覆われる。当然述部にはマイナス・イメージの強い語（否定形の場合も含めて）が置かれる。開き直りの場合は一見、自嘲に近いが、悲観的な状況を認識して感情的ではあるが反発の要素を含む表現である。以下に3例ずつ例文を挙げる。

- (1) 「いやァ、俺なんか、どうせギロチンか、セント・ヘレナ送りだよ」(山本)
- (36) おれのような、おそまき者が、まどろっこしい学問をやったって、どうせ人のしりにしかついていけないのだ。もっと手っ取り早い道はないものかなあ！(路傍)
- (37) 「すまねえな」と私はいった。「もう少し歩けるようになったら、食糧探してくる」
「いいさ、どうせ長いことはない」(野火)
- (29) 「ええ、ほかですよ。どうせわたしは、ばかなんだから……」(放浪)
- (38) 「それは覚悟の上よ。どうせ辞表出す気だったんだもの」(女)
- (39) 「どうせ死ぬんだから、旨いものでも食って死ななくっちゃ」(こ)

2) 聞き手、他者、他物の場合

見くぶりの対象が聞き手、他者、他物の場合である。これも同様、述部に原則として全て否定形ないしはマイナス・イメージの語が来る。対象が話し手の場合と違って、話し手の姿勢そのものは、前項とは逆に攻撃的な、強気の印象を与えるものが多い。各々2例ずつ挙げる。

- (11) ……でも、ヨシちゃんは、許してやれ。お前だって、どうせろくな奴じゃないんだから。(人間)
- (27) 「まあ……。会社を再建するかどうかによるな。お前みたいな下っぱはまず人員整理でどうせクビだ」(女)
- (40) 「どうせあんな小娘がやれっこないですよ。そう気になさることはない。」(女)
- (41) なぜなら高田はどうせ雇われ者で、将来の病院の実権を握る立場にはいないことを、職人たちはちゃんと知っていたからだ。(楡)
- (13) ……それから、万国旗、万国旗だ。なに、こんなものはどうせ安いものだろう」(楡)
- (42) どうせこの椅子も、すぐに壊れるに違いない。

例外的ではあるが、見くぶりといっても積極的な見くぶりではなく、いわばやむをえざる見くぶり・低評価のムードを伴い、結局は他者に対する話し手の同情を示す、次のような用例もある。

- (43) しかしそのままにして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であったらしい。(金)

3) 一般的状況

見くぶりの対象が、特定の他者・他物ではなく、話し手を取り巻く状況——生活圈といった小さな状況から、社会・世の中といった大状況まで——の場合である。やはり原則的に全て否定形

ないしはマイナス・イメージの語を含む述語と呼応し、悲観的見解を示すが、対象が特定のものではないので、前項の対象と比べて、話し手の姿勢としては、さほどの攻撃的な印象は与えないものが多い。しかし世の中の本質規定となると攻撃性は高まる。

- (44) 「大学のグラウンドなら大丈夫でしょうが、どうせこの辺は焼けるでしょうからね」
(黒)
- (45) 車を一台陸軍へ献納することにした。どうせ病院用の配給の乏しいガソリンによって残った一台をほそぼそと動かしているのが現状であったからである。(楡)
- (14) どうせ世の中は欲と金、ばあつとやっちゃおうよ、ばあつとさ、……(路傍)
- (46) それで、ビルマ人はみな坊さんになる。現世のことは考えない。どうせ現世の生活は下らないというので、別に發明しようという気もなく、ふんばつして改良をしようという気もおこらない。(ビル)

以上、「どうせ」のもつ見くびりというムードの用例を概観したが、いずれの場合も述部には原則として全て否定形ないしはマイナス・イメージの語が来るという結論になった。この結果からは、述部の否定形ないしはマイナス・イメージの語が見くびりというムードを招き寄せるとも言えそうだが、実際は中立イメージ、或いはプラス・イメージの語も「どうせ」と共起することによって、イメージの低落を起こすという現象が多少見られる。

- (47) どうか行こうよ。どうせ暇なんだろう？

常識的に考えれば、「暇だ」は中立イメージ、或いはプラス・イメージの語として規定できる。しかし逆に「やることが何もない」というマイナス・イメージを帯びさせることも可能である。この場合は後者の、反転の現象が生じたと見るべきだろう。「どうせ」のもつ基本的特性である「既定性」「短絡性」がその反転を導いたと考えられる。「どうせ」に「既定性」「短絡性」という特性がある限り、見くびりのムード((47)の場合は聞き手に対するもの)を完全に消し去ることは難しいようだ。

6. 中立イメージの語と共起する場合

1) プラス・イメージの語句との共起

筆者が抽出した156の引用例中には見当たらなかったが、中立イメージより更に上の、プラス・イメージの語と「どうせ」が共起できるかどうかを先ず考察してみよう。プラス・イメージとは主体に対して望ましい、快感を与える出来事・性質をいう。具体的には、成功する、回復する、合格する、勝つ、うれしい、楽しい、ありがたい、幸せだ、健康だ、立派だ、無事だ、等の語句が肯定形で使用された場合である。これらの幾つかは、次のように確かに「どうせ」と共起できる。

- (48) あいつはどうせ成功するに違いない。
- (49) 彼等はどうせ無事に決まっている。
- (50) 明日の試合はどうせ俺が勝つに決まっている。
- (51) 君はどうせ合格するはずだ。
- (52) あいつはどうせ天才だ。

しかし、プラス・イメージの語を使っているといっても、文面からは話し手の喜び・快感・期

待は伝わってはこない。むしろ皮肉めいたニュアンスを受ける。これらの語句は「どうせ」と共起することによって、中立イメージ扱い、或いは(52)のようにマイナス・イメージ扱いを受けたと考えられる。しかも、「～に決まっている」「～に違いない」のような短絡化の強調表現の助けを必要とするものが多い。これらの文を、推測を表す他の副詞「きっと」「多分」を使って書き替えると、プラス・イメージが現れやすい。

- (53) あいつはきっと／多分成功する。
 (54) 彼等はきっと／多分無事だ。
 (55) 明日の試合はきっと／多分俺が勝つ。
 (56) 君はきっと／多分合格する。
 (57) あいつはきっと／多分天才だ。

また、話し手の喜び・快感・期待を直截に表現したいなら、「どうせ」ではなく、「とにかく俺は勝つ」「とにかくあいつは成功する」のように、意志系の短絡表現副詞「とにかく」を使用した方がよい。

以上でプラス・イメージの語句との共起の検討は終わる。続いて、中立イメージとの共起の分析に移る。

2) 中立イメージの語句との共起

話し手を主題とし、話し手に関するコメントを表す文で用いられることは比較的少ない。2人称に関する文も同様である。

- (58) 「だってこれも修行だもの。どうせ僕も、おやじの寺を継ぐんだもの」(金)
 (59) 「お客さん、まだランプ使いますか」
 「そりゃ、あるにこしたことはないが……そっちで、いるの？」
 「いえ、私のほうは、どうせ馴れた仕事ですから……」(砂)
 (16) 「それなら歩きながら聞こうか、どうせきみも、これから会社へ行くんだろう」(孤高)
 (60) いいや、どうせすぐすぐわかるだろうから言っちゃうけど、原島はあの白デブと組んで自分の個人用の印刷の営業してきちゃ、あそこでやってるのさ。(新橋)

これらの例文で注目すべきは、いずれも、理由を表す「～から」、「～もの」、或いは理由の後付けを表わす「～だろう」の節ないしは文の中に入っているということである。続いて3人称に関する文を検討する。

- (15) 「結構ですね。ついでにパチンコ・ワナやネコイラズの業者にも当たっておきます。これはどうせいる(要る=筆者)ものですからね」(パ)
 (61) 「(君を殴りつけた上級生たちが=筆者)帰ったのなら、駅へ行ってみましょう。どうせ、そのうち何人かは汽車通学でしょう」(あす)
 (62) 「だって、どうせ夜だぜ。(後をつけても=筆者)見つかりゃしないよ」(トム)
 (63) 《それにどうせ同じことだ、二人はまだ何も知らないんだし》と彼は考えた。(罪)
 (64) それでは一週間もこの福岡にとまっていたか、九州のどこかをうろついていたことになる。どうせトランクは持っていたらうから、それを捜す必要もある。(点)

このように、1人称、2人称、3人称とも、中立イメージの語句を使うと「見くぶり」のムードが稀薄になる。但し、他の2つの基本的性格、既定性・短絡性はいずれの例文においても保持

されている。

数は非常に少ないが、中立イメージの語句がマイナス・イメージ扱いを受けて、「どうせ」自体も「見くびり」のムードを呈示する次のようなケースもある。

- (65) (我々の昼食代は刑事が払ってくれたが、それは……=筆者)「いいのよ。どうせ私たちの税金なんだから」(女)

「私たちの税金」という語句自体は本来中立イメージの語句であるが、ここでは「私たちの税金」即ち、「刑事の自腹ではない」というマイナス・イメージの解釈が浮上し、本質規定において「見くびり」のムードが現れている。未来予測よりは本質規定の場合にマイナス・イメージ化、「見くびり」ムードが出現しやすい。

3) 理由・根拠

前項で挙げた、中立イメージの語句と共起した例文10例を別の観点から見直すと、「どうせ」の文が他の文の理由・根拠となっているケースの多いことが分かる。「どうせ～から」の明らかな理由構文が5例、理由を表す「～もの」が1例、「どうせ～だろう／でしょう」と前文の理由の後付けを表すもの2例、理由を表す「だって～」が1例で、合計9例もある。

森本(1994)の指摘する通り、事実「どうせ」は「文脈中で、理由・原因、または根拠として働く文の中に現れる傾向が非常に強い」。筆者の調査では、先述した『新潮文庫の100冊』の141例(「どうせ～なら」の15例を除いた)中、前後の文脈からそれと判断したものも含めると、理由・原因・根拠の例と考えられるものが105例を占めた。相当な高率である。しかし、その比率は、上述したように、中立イメージの語句と共起して「見くびり」ムードが稀薄となったケースで特に高くなる。

ここで参考までに、前後の文脈から理由・根拠を表すと判断できる例を3つ挙げておく。

- (14) どうせ世の中は欲と金、ばあっとやっちゃおうよ、ばあっとさ……(路傍)
 (31) この広間の辺をぶらぶらしながら、お待ちするとしよう。王のお望みとあるからにはな。どうせ運動の時間だ。(ハム)
 (37) 「すまねえな」と私はいった。「もう少し歩けるようになったら、食糧探してくる」
 「いいさ、どうせ長いことはない」(野火)

(14)では[どうせ世の中は欲と金<だから>ばあっとやっちゃおうよ,], (31)では[どうせ運動の時間だ<から>この広間の辺をぶらぶらしながら、お待ちするとしよう。], (37)では[どうせ長いことはない<くんだから>いいさ]という理由・根拠を表す構造が読み取れる。

それでは、副詞「どうせ」が理由・根拠を表す文に多用されるその理由は何であるか。筆者は「どうせ」の基本的性格の1つである短絡性にその解答を求めたいと考える。「どうせ」の短絡性とは、推論過程、或いは判断の過程において、ひとつずつ丹念に段階を追って論理的に結論を導くものではなく、逆に結論を既定の所与のものとして、一足飛びに提示する方法である。結論・結末は既に決まっているものだから、期待したり、思案したりする必要はない、或いは無駄であるというものである。随分乱暴なように見えるが、我々の日常の体験に照らしてみても、実生活においては決断の連続で、あらゆることに対して、一々丹念に緻密に可能な限りのデータを収集して、理詰めで結論を出しているわけではない。むしろ時間の節約のために、各々が過去の体験・世の中の動きの観察に基づいて直観的に未来を予測し、或いは問題の本質を直観的に把握して、決断・行動の根拠としている。いわば、「どうせ」は思案の節約を担う機能を一方では果

たしていると言える。その根拠となる、話し手による過去の体験・世の中の動きの観察のデータそのものが悲観的なものであれば、予測・判断もまた悲観的なものになりがちであろうが、いずれにしろ直観、即ち思考の短絡性それ自体は我々の実生活において有効に機能していることは間違いない。結局「どうせ」の短絡性は、結論を急がせ効率的な決断を導く役割を担っており、その結果、「どうせ」は理由・根拠を表す文に多用されるのだと考えられる。但し、「どうせ」が見くびりのムードをもつ場合は、

(1) 「いやァ、俺なんか、どうせギロチンか、セント・ヘレナ送りだよ」(山本)

のように、そのムードそれだけで十分独立した文の構成が可能であるが、中立イメージの述語と共起して見くびりのムードが稀薄になると、既定性・短絡性のウェイトが高まり、理由・根拠を表す表現に依拠する傾向がより強くなるのだと思われる。

なお、「どうせ」が理由・根拠を表す場合も、当然その理由・根拠と結論との関係は短絡的な主観性の強いものであるから、理由を表す代表的な接続助詞「から」「ので」のうち、客観的な繋がりの場合に用いられるという「ので」より、主観的な繋がりの場合に用いられるという「から」との親和性が圧倒的に強い。筆者の『新潮文庫の100冊』の調査でも156例中、「から」との共起(「どうせ～から」)が51例あったのに対し、「ので」との共起はたったの1例(しかも「どうせ～というので」の形)に過ぎなかった。

参 考 文 献

- (1) 森田 良行 (1977)『基礎日本語1』(角川書店)
- (2) 森本 順子 (1994)『話し手の主観を表す副詞について』(くろしお出版)
- (3) 渡辺実・編 (1983)『副用語の研究』(明治書院)
- (4) 市川 孝 (1976)「副用語」『岩波講座日本語6 文法1』(岩波書店)
- (5) 竹内美智子 (1973)「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』(明治書院)
- (6) 工藤 浩 (1982)「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告71』(秀英出版)
- (7) 飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』(東京堂出版)
- (8) 板坂 元 (1971)『日本人の論理構造』(講談社)
- (9) 杉本 和之 (1997)「意志動詞と無意志動詞の研究-その2」『愛媛大学教育学部紀要 第29巻第2号 第Ⅱ部 人文・社会科学』
- (10) 杉本 和之 (1990)『『のだ』の種々相』『中京国文学 9』(中京大学国文学会)
- (11) 永野 賢 (1952)『『から』と『ので』とはどう違うか』『國語と國文学29巻 2號』

(2000年6月1日受理)